

新島の時代、私たちの時代

奨励	和田 喜彦〔わだ・よしひこ〕
奨励者紹介	同志社大学E Uキャンパス支援室長 同志社大学経済学部教授 〔研究テーマ〕 エコロジー経済学、鉱山・核開発の環境影響、良心学

イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」

(ヨハネによる福音書 8章31—32節)

「真理は汝を自由にする」

今出川キャンパス明徳館の正面の右上に、「真理は汝を自由にする」という言葉がラテン語で書かれています。真理、真実を知ることによって本当の意味で私たちは自由になる、という意味です。逆に言えば、真理、真実を知ることができなければ、自由ではない、捕われの身同然であるということです。

「真理は汝を自由にする」の元となったのは、先ほど司式者に読んでいただきました聖書箇所ヨハネによる福音書8章31節から32節です。

その解釈はさておき、新島襄が生まれた時代にさかのぼって、真理、真実、その反対語としての偽り、ごまかし、ウソ、詐欺、という観点から時代の様子を観察してみましょう。

新島襄の海外留学の志とその実現

同志社を創立した新島襄は、江戸時代末期の1843年に江戸の神田一ツ橋にあった安中藩江戸屋敷にて生まれました。現在の東京メトロ東西線「竹橋」駅から徒歩5分程度の距離にあります。ちなみにその場所には、その後、東京大学の前身である帝国大学が設置され、それが本郷に移転しまして、現在その場所には学士会館という建物があります。

新島は、安中藩の藩士として、藩主である板倉家に仕えました。父の新島民治が祐筆職（＝書記）の仕事をしていました。新島が17歳の時、藩主が大坂城の警護を幕府から命じられ大坂に赴任となり、父民治も同行することとなりました。新島は父の後任として祐筆職の仕事を任せられました。新島は、好奇心旺盛な青年でしたので、仕事の合間に勉強を進めていたが、それを疎ましく思う同僚がいましたし、また、幕末には辻斬りなどが流行したため、藩主が外出する際には、護衛として御供をしなければならないなど、いよいよ勉強時間が確保できない状況となりました。とりわけ、新島の才能を高く評価し勉強を許してきた板倉勝明が亡くなった後は、勉強がさらにしづらくなったようで、自らを「籠の中の鳥のように捕われの身であると感じたようです。

時は前後しますが、新島が15歳の時、すなわち1858年に日米修好通商条約が締結され、翌年1859年には横浜が開港となり、鎖国時代は終わりました。しかし、禁書制度は開国後も続いていました。つまり、相変わらず情報は幕府によって統制を受けていましたので、読みたい本を自由に手に入れることができない状況でした。幕府にとって都合の悪い情報は検閲され、人眼には触れない状況が続いていたのです。

1863年、20歳となった新島は、たまたま日本語訳の『ロビンソン・クルーソー物語』、アメリカの地理書である『聯邦志略』、そして、1冊の漢訳聖書抜粋を入手することができました。こうした本との出会いを経て、海外、特にアメリカへの想いを強くしていきました。

新島は海外への脱国を決断し、即実行に移しました。『ロビンソン・クルーソー物語』や『聯邦志略』を読んだ翌年、1864年、彼が21歳の時、安中藩を脱藩し、函館に渡り、ロシア人宣教師のニコライ司祭の助力を得て、極秘の内に上海行きベルリン号に乗船し、日本を脱出しました。新島は、アメリカでの10年近くに及び留学生活を終えて1874年に帰国しました。新島はその時、満31歳でした。

帰国した新島がショックを受けた日本～ウソ・虚言の横行

新島が帰国した時は、徳川幕府が倒されてから7年後の明治7年でした。新島にとって、日本社会は政治体制が変わっても、以前と比較して良くなっているという実感はあまりなかったようです。特に、アメリカの中でも、実直かつ自治自立の精神に富むピューリタンが多く住むニューイングランドで生活した新島にとって、封建時代の弊害が色濃く残る明治初期の日本社会に逆カルチャーショックを覚えたようです。

とりわけ、新島は、日本社会で「嘘」が平気で語られる、偽りが横行することに心を痛めたようです。「人種改良論」（1880年）という文章には、以下の記述があります。「欧米人は我が日本人をさして『ウソツキ』と云うも過言にあらざるべし。如何（なん）となれば、『ウソ八百』と云う言葉もあり。『ウソで通る世の中』と云う語も、大分ウソの通行する国たるは明らかなり。我が日本も亜細亜（アジア）の東海に位して神国とも君子国とも云いて慢（おご）りたる国柄も、この風習あるは遺憾にあらざるや」（同志社編 『新島襄教育宗教論集』 岩波書店 2010年）。

私自身、明治生まれの実直な祖父を見て育ちましたので、江戸時代や明治期の日本人は誠実で正直であったと認識していました。そのような私にとって、新島による明治期の日本社会に対する批判はショックでした。

この現象を、当時の状況を勘案して寛大な気持ちで解釈すれば、次のような事情があったのではと思います。すなわち、江戸時代には徳川幕府、明治維新以降は明治政府という絶対的な政治権力が存在していました。その強大な権力は、殺生（さっせい）と奪（よだつ）の力をもっていました。それに対し、反対意見を言いたくも言えないような状況にある個人や集団が、生きながらえるため、いじめや迫害を回避するために本当のことを言わない、真実を語ることをしないことが常態化した。つまり、「長いものには巻かれよ」、「生きるためであれば、本心を言わない、場合によっては嘘も必要」、「ウソも方便」という生き続けるための処世術を容認する雰囲気＝ウソに対する寛大さを醸し上げたのだと推察します。

新島の目指した日本社会のあるべき姿

いずれにせよ、新島は、そのような社会ではだめだと思い、誰もが自由に真実な情報にアクセスでき、真理を知り、真理を語るることができる日本を造ろうと努力しました。そして、権力の顔色をうかがうのではなく、自らの良心に従って真実を正々堂々と語り、議論することができる人物を養成しようとし、同志社英学校を143年前の1875年に設立しました。143年の歳月を経て、果たして、新島の理想は実現されたのでしょうか。

私たちの時代もウソが横行

最近、真実をないがしろにする風潮が世の中に増幅してきていると感じます。

たとえば、東芝、神戸製鋼などの日本を代表する大企業が、データ改ざんを長年に渡って繰り返してきたことが明らかになりました。お隣の某医科大学では、高血圧の新薬に関する実験データを改ざんする研究不正が3年前に明らかになりました。

しかし、最も大きな問題は、政治を食い物にする政治家たちと首相官邸、利害関係がある官僚らによる公的文書の隠蔽、改ざん、ごまかし、そしてその犯罪的行為を与党や財界、司法が容認していることです。

東京オリンピック・パラリンピック誘致のための虚構

2020年の夏に開催予定の東京オリンピック・パラリンピックは、「福島原発の汚染水は、完全にコントロール（制御）されている」という現役総理大臣のスピーチが功を奏し、開催が決定しました（2013年9月開催のブエノスアイレスIOC総会）。元総理大臣の小泉純一郎氏や元スイス大使の村田光平氏は、総理大臣によるスピーチは完全な「大嘘」であったと痛烈に批判しています。汚染水の発生量は減少したとされますが、現時点においても依然として発生し続けています。汚染水は除去装置で浄化されますが、トリチウムという放射性物質は除去できません。トリチウムを含む処理水は原発敷地内のタンクに貯蔵されていますが、満杯に近づいていて、今後どのようにするかは未定です。汚染水は完全にコントロールされているという言説は、現段階においても完全に破綻しています。

福島原発避難区域への帰還の強要

汚染水以外の面でも状況は深刻なままです。福島原発周辺の宅地、森林の放射性物質による土壌汚染は厳然と存在するのですが、東京オリンピック・パラリンピックの開催に水を差すことは避けようとする日本政府は、さまざまな「福島隠し」対策を講じています。たとえば、日本政府は帰還困難区域であっても、年間被曝量が20ミリシーベルト以下であれば安全だと宣言して、強引に帰還を進めています。日本の法令では、一般市民の年間被曝限度量を1ミリシーベルトまでと決めているにもかかわらず、福島県だけが特例扱いです。これは差別で

あり、法令違反であり、法の下の平等を定めた憲法違反ではないでしょうか。

特に問題なのは、福島県内から全国各地に自主避難している人たちへの住宅補助を、京都市を含む全国の自治体が自主的に実施してきましたが、昨年3月までに住宅補助を打ち切るように日本政府の役人が全国の自治体を訪ね、説得して回った事実です。自らが造り上げた虚構を虚構でないと説得するためには、子どもたちも含め一般市民を被曝させることも辞さないというのが現在の政権の方針のようです。帰還すると被曝し、もしかすると健康被害が発生したり、亡くなる人がいる可能性がある。それを承知で無理矢理帰還させることは「未必の故意」を根拠とする殺人罪・傷害罪に当たる可能性があります。

（未必の故意：確定的に犯罪を行おうとするのではないが、結果的に犯罪行為になってもかまわないと思って犯行に及び実際の容疑者の心理状態。殺人事件の場合、明確な殺意がなくても、相手が死ぬ危険性を認識していれば、故意として殺人罪が適用される）。

森友学園に関係する公的な判決書の改ざんが問題となって、自殺者まで出てしまいましたが、福島はもっと多くの人々の生き死にに関わることで、より重大な問題と思われれます。

自衛隊日報問題

イラク戦争や南スーダンに派遣された自衛隊の日報が存在しているのにもかかわらず、存在していなかったという答弁が防衛大臣から発せられました。その答弁が最近、虚偽であったことが判明して問題となっています。また、自衛隊が派遣されたのは戦闘地域ではなかったという答弁も偽りであったことが最近判明しました。自衛隊の日報には、自衛隊の宿営地に迫撃砲が何発も撃ち込まれたこと、すなわち戦闘に巻き込まれていたことが明確に書かれていました。

森友学園判決文書改ざん疑惑・働き方改革関連法案のデータ捏造疑惑

森友学園の土地取得の際には、埋設されていた廃棄物の量が、意図的にかさ上げされた数字であったことが野党の追及などで明らかになりました。改ざんされたデータに基づく見積書を根拠とし、8億円もの値引きが行われました。虚偽データを根拠とし、国民の財産が不当に安く払い下げられたのです。

森友事件については、総理大臣の関与が隠蔽されるべく「判決文書」が判決後に改ざんされていたことも判明しました。そもそも、行政文書は歴史の審判を受けるべく長期保存されます。そのような重要な文書を400箇所以上も改ざんしたのですから、歴史に対する冒瀆であり、将来世代を欺く重大犯罪です。少し前に言及しましたように、近畿財務局の公務員（赤木俊夫・上席国有管理官）が「判決文書を書き換えさせられた」として自殺するという痛ましい事件も発生しました。非常に残念なことです。

厚生労働省は、働き方改革関連法案を通すために、恣意的な捏造したデータを国会に提出していました。国民の代表を欺いて法律を通そうとしました。新島が心を痛めた「ウソが通行する」日本が近年息を吹き返したようです。

いずれにせよ、真理や真実を追求し、真実を語る人材を養成するはずの大学を卒業した人たちが、こうした不正に関わっていたのです。新島は草葉の陰でさぞかし悲しんでいることと思います。

同志社歴代社長、総長

さて、私は同志社の歴史を時系列に、しかも端的に把握しようとすれば、歴代社長、総長一人ひとりの経歴と同志社における実績を追っていくのが一つの近道だと思います。なお、「社長」という呼称は七代目原田助社長時代の中途から「総長」に変わります。

本日は詳しくお話しする時間はございませんが、新島亡き後の社長、総長人事は波乱の連続です。最初の波乱は新島の死後、早速、起こります。それまで後継者は金森通倫で衆目の一致するところでした。

この絵は徳富蘇峰の知人、久保田米僊（べいせん）という画家が描いた「新島襄先生臨終図」ですが、この場で蘇峰により聴取された新島の遺言に金森の資質に懸念を示す文言が含まれていて、金森後継の芽がなくなります。

臨時的に新島の後を山本覚馬が社長代理として埋め、2年後に小崎弘道にバトンタッチされますが、その後も難しい人事局面が度々ありました。

下の図は歴代社長・総長の一覧ですが、特に原田助総長辞任後、第八代海老名総長誕生までが、かなりの難産でした。有力な方たちの名前が多く候補として挙がりました。安部磯雄、浮田和民、小野英二郎、横井時雄（既に三代目を一度務めている）、そして徳富蘇峰まで、異色は新渡戸稲造です。

真実に生きようとする若者たちの存在

しかし、我々は悲しんでばかりはいられません。ある意味、希望もあります。

日本大学アメリカンフットボール部の宮川泰介選手は、対戦相手の関西学院大学のクォーターバックの選手に対し不意打ちタックルを浴びせ、意図的にケガを負わせました。直後に彼はこのことを心から反省し、謝罪し、そして監督からの指示があった、と真実を語りました。他の部員も彼の発言を支持しました。

一方、監督やコーチは、保身のため嘘をつき続けています。大人たちの腐敗、隠蔽体質は情けない限りですが、若者たちは真実に生きようとしていることが本当に救いでした。

強大な権力にひるんでしまう人間の弱さの発見

しかし、我々は悲しんでばかりはいられません。ある意味、希望もあります。

日本大学アメリカンフットボール部の宮川泰介選手は、対戦相手の関西学院大学のクォーターバックの選手に対し不意打ちタックルを浴びせ、意図的にケガを負わせました。直後に彼はこのことを心から反省し、謝罪し、そして監督からの指示があった、と真実を語りました。他の部員も彼の発言を支持しました。

一方、監督やコーチは、保身のため嘘をつき続けています。大人たちの腐敗、隠蔽体質は情けない限りですが、若者たちは真実に生きようとしていることが本当に救いでした。

良心を貫くことのできる人物となる

そして、新島は、そのような社会状況を根源的に変えていくための処方箋を示してくれました。それは、私たち一人ひとりが良心の働きを活性化させ、「良心を手腕に運用する人物」になることです。そのような人物が一人でも多く誕生することこそが、世の中をより正しいものに変えていくために必要なことです。ぜひとも、同志社大学在学中に、新島の理想とした「良心の充満したる丈夫」に近づくべく努力を重ねていってください。

若い皆さんの純粋な気持ち、勇気、良心の覚醒に期待しつつ今日の話をお願いいたします。

ご清聴ありがとうございました。

一緒に祈りましょう。

御在天の神様、今日は、同志社スピリット・ウィークの一環としてのこのチャペル・アワーに参加することができまして、このような貴重な機会を与えてくださりましたことを感謝いたします。

神様、あなたは、私たちの弱さを自覚させてくださいました。しかし、同時に、それを克服する方法と力を与えてくださいました。

どうか、真実は何かを自分の力で見極め、権力者の強大な圧力にひるむことなく勇気をもって真実を語るができますように。良心を強めてください。

権力者に目を向けるのではなく、神様、あなたのみを見つめて人生を歩むことができますように力を与えてください。

新島襄が目指した人物に少しでも近づくことができますよう、一人ひとりに勇気と力と決断力をお与えください。

今日ここに集まった人たちだけでなく、来られなかった人たちをも顧みてください。

この感謝と願いを、皆様の心の内の祈りと共に、御前にお捧げいたします。アーメン。